

平成 30 年 5 月 16 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02466

研究課題名(和文) 日本語の統語と構文の語用論的選好に関する研究 統語語用論の基盤整備のために

研究課題名(英文) A study on pragmatic preferences about Japanese constructions

研究代表者

加藤 重広 (Kato, Shigehiro)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：40283048

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の構文に関する運用上の選好があること、選好が解釈の傾きを形成する動機になっていることを明らかにした。モダリティ助動詞の形成については、どのような語彙的資源が文法化に用いられているか、構文形成上どのような制約を有しているかなどを明確にし、特に、時制標示との関わりが深いこと、述部複合構造で時制標示が複数現れるマルチテンスが日本語の構造的性質の1つであり、それが推意、特に慣習的推意を形成していることを明らかにした。助動詞類の推意は、形式上、構文推意に区分できるが、推意の固着の度合い(慣習化の度合い)も個々に異なることから、推意の慣習性・固着度あるいは強度に尺度を導入すべきことを提案した。

研究成果の概要(英文)：This study has successfully made clear pragmatic preferences in choosing a particular constructions among the Japanese speakers. These preferences induce particularized or conventionalized implicatures and helps lexical elements grammaticalized into new syntactic structures, which work as new auxiliary verbs or postpositions in Japanese. In particular, because of the syntactic properties of Japanese, which allows multiple tense markings in a single complex predicate, we can make use of new constructional implicatures in the pragmatic study of Japanese.

研究分野：言語学

キーワード：選好 構文 文法化 推意 慣習性

1. 研究開始当初の背景

言語研究における語用論・意味論・統語論などの研究は、さまざまな枠組みがこれまで提案され、高度化・専門化・細分化が進み、言語研究全体の中でも没交渉の状況が多く見られる。高度化によって研究が相互の連絡を失うことは、研究が発展する過程ではやむを得ざる面もあるが、一方で言語研究全体の統合性や整合性が損なわれているとも言える。現在、語用論の研究は、言語学プロパーの一部とみる方向性と、認知言語学や社会言語学など研究の方法論や対象によって独自性・自立性を持った領域とする方向性が混在している。加えて、近年、統語論と語用論の接近など、従来の垣根を取り払う傾向も見られ、領域区分を設けず全体として言語を複雑系とみる研究も進められている。

日本語を対象とする研究では、記述文法と親縁性のある談話文法が一定の成果を残しているが、語用論や統語論にはやや英米の研究の適用という印象が見られ、実質的に語用論の成果となるものや通言語学的に見て価値のある現象記述も、その発信すべき価値に気づくことなく、日本国内の一部の研究として十分に理解されないままであることが少なくない。これは端的に言って、実に「もったいない」ことである。日本語研究のなかで蓄積された成果を普遍性のある一般言語学の成果にそのまま読み替えるのは繊細さを欠くが、有効な形に整え、取捨選択し、国際的に求められ、理解しやすい成果として整えて発信することは有意義である。

語用論と統語論に関わる研究としては、この20年ほどは文法化の成果が多かったが、文法化と語用論的選好(preference)を関連づける見方、文法化とは逆の脱文法化、両領域を統合的に捉える認知言語学の視点を更に複雑系へと拡張した複雑適応系(CAS)などが見られる。これらが言語研究の1つの潮流をなすのならば、日本語研究からそれらに寄与することが求められる。また、双方向的やりとりを可能にする枠組みを日本語研究の中から提案することが望ましい状況にある。

2. 研究の目的

(1) 統語論と語用論をつなぐ統合的な枠組みの基盤を構築し、その機能的有効性を検証して、提案すること。これまで、統語語用論などと呼ばれる境界域の研究はあるが、それは一方から他方へ越境しようとする一方向性のインターフェイスであるが、本計画でいう「統合的な枠組みの基盤」とは、統語論と語用論の双方向性・相互性を担保された複合領域・統合領域の基盤としての統語語用論である。

(2) 従来の日本語研究の成果を発展させながら、グローバルに寄与する成果になるよう調整していく作業を行うこと。従来の談話文法の成果は、記述文法に取り込まれているが、

概ね文法論としてのみ研究されている。これを語用論の観点から整理し直し、評価し直して、新たな成果として発信することが必要な段階にあるが、この作業は十分になされていないので、本研究ではこれを集約的に進める。新たな研究として特に焦点と情報構造に関する基盤的知見の整理と調整、それに、発展的な整理と提案を加えていく。

(3) 日本語の談話にかかわる選好性の総合的研究である。選好性が文法規則を形成するという考えはすでに見られるが、原初の文法構造の形成に選好性のみが作用したとは考えにくい。本研究では、理論的一貫性を重視して方法論を検証するとともに、個別の具体的研究を体系化していく。日本語については、連体修飾構造や言いさし・非従属化などの研究が散発的にあるが、より発展的に整合性のある成果として提示できるようにする。

(4) 研究基盤に実質を与え、関連領域との連携を容易にする研究方法の調査とその有効性の予備的検証。近年、文法変化や意味変化の研究にコーパスを用いることはあるが、語用論では文脈に関する情報が十分に蓄積しないため積極的に利用した研究は少ない。状況文脈や知識文脈を蓄積する方法を多様に開発・検証するとともに、回答者の負担を軽減しながら必要なデータを一定の質で確保する方法論について論究を深める。また、アンケートで受容度を判断させることはあるが、比較方法や提示方法が不十分で、計量的研究に十分活用できる段階に入っているとは言えないため、専門知識を有する専門家の助言を得ながら、次の研究段階の予備的検証として、現状と可能性の確認・整理を行うことを目指す。

3. 研究の方法

言語学あるいは言語研究における「語用論」の研究は、個別の具体的なテーマを掲げて行われることが多い。それはもちろん着実な成果の積み上げとして意味があるが、本研究は語用論そのものの位置づけや方法論に関わる基礎的枠組みを創出する点に独自性があり、言語学と隣接領域におけるパラダイムの転換を視野に語用論を起点として新しい時代の言語学のあり方を検証する点にその特色と価値がある。

日本国内における日本語の研究には、局的にはあるが海外における研究に比しても相当に進展している面があり、一般言語学や通言語学の観点から評価しても、極めて重要な成果になっているものがある。そのいくつかは海外に知られているが、それも部分なものにすぎない。成果の発信が不活発で海外における受容や評価が低調になっている最大の理由は、言語学における方法論や知見は西欧のそれを事実上の標準としており、日本国内における日本語仕様の研究はそのままでは理解や受容が難しいことである。本研究

は、この問題点を解消し、一般言語学的に見て着目すべき成果や知見を受容される形に整えて発信するが、また、そのための態勢を確立することも目指した。

その中には、これまでの研究成果を高度化させた構文推意と語彙推意の対立の提案や、その基盤にある文脈予測と文脈創成（RTとは異なる意味での復元）、従来の情報構造研究を発展させた範列的焦点と連辞的焦点の違いなど、個別テーマとしても有意義な成果となる研究を提案する。日本語の「は」は一般言語学的には focus marker あるいは topic marker のように説明されることが多いが、日本語学・国語学では提題の助詞あるいはとりたて詞とされ、その提題性・対比性は focus marker には反映しにくい。また topic marker としても、排他性や対比性は見えにくく、格助詞の総記の排他用法との差異が不明確なため、類似の議論が通じない状況にある。本研究では、焦点と題目・対比性・排他性・限定性・前提・脱焦点と情報構造などの概念を整理し、日本語文法の成果が一般言語学の成果として寄与できる状況をもたらすことを目指している。これは個別言語の研究にも言語類型論や通言語学の研究にも貢献し、それらの成果をもってさらに日本語の研究を深化し、高度でありながら一般的な研究の基盤との連絡を失わないものにするのが可能である。

合わせて、語用論の研究に寄与する実用的なデータ収集の方法論を実際的に提言することで、これまで分析者の直観のみを根拠にしてきた研究に実証性と検証性を付与することが可能になる。これは理論的な研究として理解される範囲を限定してきた言語研究を双方向的に開放することにつながり、新たな研究の段階に展開させることが期待できる。加えて、多様なデータ集積を一般化して共通化することで、研究における成果の有効利用が可能になる。

4. 研究成果

(1) 語用論と統語論の統合領域として、統語語用論という領域の枠組みを提案した。これは、従来の日本語記述文法研究や段文法研究の成果を継承し、新たに語用論や認知言語学などの成果を活用しながら、これまで議論しにくかったテーマも新しい観点から取り上げることができるものである。また、複雑適応系の枠組みとも整合するように精緻化を進めている。言語研究者に広く浸透しているとは言えない状況であるが、その効用を引き続き説いていく。

(2) 日本語研究の成果を選好の観点から統語語用論的に分析した結果、助動詞を含む複合述部のマルチ・テンスの効果と解釈、その推意慣習化の違いなどがいくつかの形式ごとに明らかになった。構文のレベルでない、語彙的な推意についても、いくつかの動詞に

ついてその意味解釈が推意として記述できることを示した。

(3) 日本語の副助詞を統語語用論的な観点から分析し直し、助詞スロット構造という枠組みで記述できること、ハは1つのスロットにのみ現れるが、モは2つのスロットに現れるもので、機能分担があることなどを明らかにした。加えて、情報構造における「焦点」と「焦点辞」の定義についても細分化して定義し直した。

(4) 日本語が名詞述語構文を好む選好性が、構文化に与える影響について論点を整理した。これは、人魚構文やベネファクティブ構文などにも援用可能であることを示した。この種の選好が、構造あるいは認知あるいは伝達のストラテジーに深く関わっている点も明示的に分析した。

(5) 日本語が、右方主要部型言語であることと言語的「前適応」の関係、モダリティに関わる要素を重ねて付加していける特性が、構造的重心と意味的重心のずれを生じさせていること、それを日本語使用者が運用上選好し、曖昧化の傾向を強めていることなどを解明した。

(6) 前項の選好が、いいさしとしての非従属化を可能にする構造的「前適応」にもなっていることを明らかにし、非従属化に省略だけでなく、付加があることを指摘した。また、いいさしの形式の一つとして扱われることが多かった「みたいな」の付加については、引用の階層化という点から分析し直し、談話カプセル化という現象として捉えることができるものと主張した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

加藤重広、「文脈の科学としての語用論：演繹的文脈と線条性」、『語用論研究』18, 査読なし, 日本語用論学会, 2017年, 78-101

加藤重広、「北奥方言における行為要求表現」、『北海道大学文学研究科紀要』, 査読なし, vol.151, 2017年, 49-59

加藤重広、「日本語の構文推意：推意解釈から構文機能への拡張」, 早瀬尚子・天野みどり(編)『構文と意味の拡がり』, くろしお出版, 査読なし, 2017年, 119-140

加藤重広、「日本語副助詞の統語語用論的分析」, 『日本語語用論フォーラム』2, 査読あり, ひつじ書房, 2017年, 1-46

加藤重広、「日本語の情報構造と語用論的選好」, 加藤・佐藤(編)『情報科学と言語研究』現代図書(発行)・星雲社(発売), 北海道大学文学研究科刊行助成図書, 査読なし, 2016年, 43-64

加藤重広、「構文推意の語用論的分析 — 可能構文を中心に —」、『北海道大学文学研究

科紀要』,査読なし,北海道大学文学研究科,
Vol.146, 2015年 259-294

加藤重広,「形容動詞から見る品詞体系」
『日本語文法』,査読あり,15-2,日本語文法
学会,2015年,48-64

加藤重広,「発話的な効力と発話内的な効
力 —日本語の疑問形式を出発点に—」
『日本語語用論フォーラム』1,査読あり,
ひつじ書房,2015年,27-56,

〔学会発表〕(計8件)

加藤重広,「日本語の語用選好と統語特性」
成蹊大学公開シンポジウム『語用論と認知言
語学の接点を求めて』招待講演,2017年

加藤重広,「形態統語論的な規則の拮抗
について」,東京外国語大学,アジア・アフリ
カ言語文化研究所,共同利用・共同研究
課題「複雑系としての言語:運用に基づく
文法理論の可能性」,2016年

加藤重広,「動的な文脈設定と線条的語用
論の試み」,第3回京都語用論コロキウム
(京都工芸繊維大学),2016年

加藤重広,「3つの推意と夕形」,『構文の
意味と広がり』研究会,2016年

加藤重広,「日本語関係節構造の類型性と
語用論的制約」,国立国語研究所国際共同研
究プロジェクト『名詞修飾構文の対照研究』,
2016年

加藤重広,「日本語の文法書について」,
東京外国語大学アジア アフリカ言語文化研
究所共同利用共同研究課題研究会『参照文法
研究』,2016年

加藤重広,「文脈の科学としての語用論」,
日本語用論学会(第19回研究大会),2016年

加藤重広,「悩める日本語 —正しい日本語
は誰が決めるのか」,富山大学人文学部第4
回公開言語学講演会,2015年

〔図書〕(計4件)

加藤重広・滝浦真人(編著),ひつじ書房,
『日本語語用論フォーラム2』,2017年,
230頁,担当執筆頁:1-46

加藤重広・安藤智子,研究社,『基礎から
学ぶ音声学講義』,2016年,269+xi頁

加藤重広・滝浦真人(編著),ひつじ書房,
『語用論研究法ガイドブック』,2016年,294
頁,担当執筆頁:1-46,159-185

加藤重広(編著),ひつじ書房,『日本語語
用論フォーラム1』,2015年,330頁,担当
執筆頁:27-56

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:

出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

加藤 重広 (KATO, Shigehiro)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号:40283048

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号:

(4)研究協力者

()